

城 樂 遺 跡

JOURAKU SITE

埋藏文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

—市道原田井1号線拡幅工事事業—

2001.2

伊那市教育委員会

伊那市建設部建設課

あ い さ つ

城楽遺跡の展開している地域は伊那市の西部地域と呼称され、この地域には数多くの遺跡が確認されています。遺跡とは人類の生活の実態を実証してくれる正に生きた物的証拠となり得ます。

今回の調査対象地区となった城楽遺跡は通称、小黒原台地と呼ばれる一帯の北部地区、小沢川南側の河岸段丘突端面に位置しています。城楽遺跡と南境を接して、昨年、発掘調査を実施した富士塚遺跡が存在し、この遺跡周辺一帯は、近世、富士信仰の拠点となった「富士塚」が構築された場所として多くの市民に知られています。加えて、日本地質学会で、全国的に名をとどろかせた「小黒川活断層地帯」が南北に走向しています。

このたび、この地域に市道原田井1号線拡幅工事事業が導入されることになり、着工するに先だって緊急発掘調査を実施し、その調査結果を著したのがこの報告書であります。

本調査は平成12年5月～6月にかけて実施されました。限定された道路幅だけの調査だったが、関西地方から波及した縄文前期後半頃の北白川下層Ⅲ式(6000年位前)の整穴住居址が1軒検出されました。ちなみにこの住居址は伊那市では初見であります。

発掘調査に当たっては長野県教育委員会文化財・生涯学習課、伊那市建設部建設課をはじめとする関係諸機関及び関係者の皆様に多大なご協力をいただきました。ここに厚く感謝の意を表する次第であります。

平成13年2月1日

伊那市教育委員会

教育長 保 科 恭 治

目 次

あいさつ

目 次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 城楽遺跡とその環境	3
第1節 位置と地形	3
第2節 周辺の遺跡	3
第3節 遺跡の概要	4
第Ⅱ章 発掘調査の経過	5
第1節 発掘調査に至るまでの経過	5
第2節 調査の組織	5
第3節 発掘調査日誌	6
第Ⅲ章 発掘調査	7
第1節 調査の概要	7
第2節 遺構と遺物	7
(1) 縄文時代の遺構と遺物	7
(2) 江戸時代の遺構と昭和時代の遺物	9
第Ⅳ章 所 見	10

挿 図 目 次

第1図 遺跡分布図（城楽遺跡付近の主要な遺跡）	3
第2図 地形及び遺構・トレンチ配置図	4
第3図 第1号住居址実測図	7
第4図 第1号住居址出土土器拓影	8
第5図 旧原田井筋断面図	9

図 版 目 次

図版1 遺跡遠景
図版2 遺構及び遺物出土状況
図版3 遺 構

第Ⅰ章 城楽遺跡とその環境



第1図 遺跡分布図（城樂遺跡付近の主要な遺跡）(1:50,000)

第1節 位置と地形

城樂遺跡は長野県伊那市荒井区上荒井の西端部地域一帯に所在しており、南側は小黒川左岸河岸段丘、北側は小沢川右岸河岸段丘に挟在された通称小黒原山麓扇状地の北側扇測部分に該当し、この地区いわば小沢川右岸河岸段丘の突端部に位置している状況である。この一帯を形成している基盤は天竜川の支流である小沢川礫層より成立し、その上に何層にもわたって厚くテフラ層が覆いかぶさっている。このテフラ層の一部分に深い亀裂が混入している。これらは南北に長く走る活断層の痕跡であり、「小黒川活断層」と呼称され、日本地質学会で一大セッションを巻き起こしている。遺跡地の南側には凹地状地形が広がりをなし、一大水田地帯を形成している。この一帯は原田井土地改良区によって管理・維持されている。

近年、この一帯は宅地化が進み、水田地帯が変貌しつつある。

第2節 周辺の遺跡

本遺跡地の周辺には遺跡の存在性が極めて希薄であって、発掘当初は何も無いのではないかと考えていたが、実際に発掘調査を実施してみると後述するような成果があった。この存在する意義は何であろうか。大きな河川の突端部には遺跡の存在が濃密的である現われの一例であり、この状況は明らかに遺跡の存在は水との関連性を如実に物語ってくれる好事例の一例である。

これらの関連性は先史地理学あるいは集落地理学の一分野であり、今後の研究成果が期待されるところである。いわば、考古学と地理学との一体的な研究が必要不可欠である。

今回の調査において伊那街道伊那部宿の主要な生活用水となった「旧原田井筋」の実態が把握できた。調査結果については後述する。その他、周辺の主要な遺跡の内訳については今までに刊行された数多くの遺跡発掘調査報告書に掲載されているので、それらを参考にして頂いて、今回は割愛するので、ご承知願いたい。

第3節 遺跡の概要

城楽遺跡は過去に、中央自動車道開鑿時に伴い、発掘調査を実施し、それに關しての調査報告書が昭和48年度に刊行された。それによれば検出された遺構は縄文前期後半の土坑1基、縄文後期前半の土坑1基、時期不詳の土坑2基、時期不詳のマウンド1基、近世の井筋1基、時期不詳の溝状遺構3基、太平洋戦争時の豊穴3基であった。加えて、この調査で出土した土器類は縄文後期前半の堀の内式、縄文前期末葉の下島式、縄文早期中葉の梢円押形文等々が出土している。

近世の井筋については高速藩鳥居公時代に開鑿された古文書類が発見され、これらは多くの文献に紹介され、その実態が明らかになりつつある段階である。このような経緯からして地元では「旧原田井筋」と親しみをもつて呼んでいる。

この井筋が実証するように、水利の便は良好とはいえない。このことが理由となって遺跡の濃密度は低い数値を示してはいるが、今回、発掘調査を実施した一段下がった河岸段丘面はやはり水利に恵まれ、今回の調査結果で分かるように小集落が点在していた。

今回のように近世の井筋を発掘調査した実例は上伊那郡内で次のようである。
●眼田井筋
(伊那市西春近沢渡)
●勘助稻荷井筋
(中川村)

(飯塚政美)



第2図 地形及び遺構・トレンチ配置図 (1:1,000)

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまでの経過

今回、発掘調査の該当地となった城楽遺跡は市道原田井1号線拡幅工事事業に伴う緊急発掘調査であり、調査が実施されるまでには各種の保護協議、事務上の手続きが実施され、それらの動きを年月日の順に従って記しておくこととする。

平成11年10月29日、長野県教育委員会文化財・生涯学習課職員、伊那市教育委員会社会教育課職員、伊那市建設部建設課職員の三者で綿密な保護協議を実施、支障のないように努めた。

平成12年4月3日付けで、伊那市長小坂権男と市内遺跡発掘調査団団長友野良一両者間で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を締結。

平成12年7月6日付けで、城楽遺跡発掘調査終了報告書を長野県教育委員会教育長宛に提出。

平成12年7月6日付けで、城楽遺跡埋蔵物発見届の拾得についてを伊那警察署長宛に提出。

平成12年7月6日付けで、城楽遺跡埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会へ提出。

第2節 調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

伊那市教育委員会

委員長 登 内 孝 (平成13年1月25日から)

タ 小田切 仁 (平成13年1月24日まで)

委員長代理 小坂栄一

委 員 小松光男 (平成13年1月24日まで)

タ 伊藤晴夫 (平成13年1月25日から)

タ 上島武留

教 育 長 保科恭治

教 育 次 長 唐沢勇

事 務 局 酒井俊彦 (社会教育課長)

タ 伊藤初美 (社会教育課長補佐 女性室長)

タ 白鳥今朝昭 (社会教育係長)

タ 斎藤峰子 (社会教育青少年係長)

タ 飯塚政美 (社会教育係)

タ 牧田としみ (社会教育係)

タ 高松慎一 (社会教育係)

発掘調査団

団長 友野良一（日本考古学協会会員）
調査員 飯塚政美（　　）
　　本田秀明（長野県考古学会会員）
　　高松慎一（上伊那郷土研究会会員）
作業員 城倉三成 織井和美 酒井公士郎 有賀秀子 小田切守正（敬称略順不同）

第3節 発掘調査日誌

- 平成12年5月26日(金) 伊那市考古資料館にて発掘機材の整備を行う。
- 平成12年5月29日(月) 先日と同様な作業を実施する。
- 平成12年5月30日(火) 前日と同様な作業を実施する。
- 平成12年6月1日(水) 発掘現場へ発掘機材一式を運搬する。
- 平成12年6月2日(木) 昨日、運搬した発掘機材をテントを建てた後で、その中に整理・整頓して収納する。
- 平成12年6月5日(日) トレンチ設定部分の草刈りを実施する。
- 平成12年6月7日(火) トレンチを南北に道路用地内の西側より第1号トレンチ、第2号トレンチ、第3号トレンチとそれぞれ命名する。第1号トレンチより掘り下げを開始するが、遺物の出土は何も無かった。
- 平成12年6月8日(水) 第1号トレンチの東側に南北に第2号トレンチを設定してあり、それを掘り進める。遺構・遺物の検出は何も無かった。
- 平成12年6月15日(水) 第2号トレンチの南側に落ち込みが検出され、精査を進めると、住居址となり、これを第1号住居址と命名し、拡張してプランを確認すると円形状になった。掘り下げていくと、縄文前期後半の土器片が出土した。土器文様からして北白川下層Ⅲ式と想定できた。
- 平成12年6月16日(木) 第1号住居址の掘り下げを進める。
- 平成12年6月19日(日) 第1号住居址の掘り下げ、旧原田井筋の掘り下げをそれぞれ進行する。
- 平成12年6月20日(火) 第1号住居址の柱穴、旧原田井筋のセクション面をきれいにしながら掘り下げる。埋め戻しを開始する。
- 平成12年6月21日(水) 第1号住居址の清掃、写真撮影、実測、旧原田井筋の清掃、写真撮影、実測をそれぞれ終了する。
- 平成12年6月29日(木) 埋め戻し、発掘機材の撤収、本日をもって発掘作業終了。
- 平成12年11月～平成13年2月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、報告書を印刷所へ入れ、印刷を開始し、校正を行い、2月の報告書刊行に努力を払った。
- 平成13年2月 報告書を刊行し、本事業の完了をみた。 (飯塚政美)

第Ⅲ章 発掘調査

第1節 調査の概要

城楽遺跡周辺は農振農用地区内に指定されており、現況は水田、畑地に利用されている。したがって、夏ともなれば農作物によって青々とした田園風景が見られると、同時に伊那市の穀倉地帯の一角に組み込んでもよいと思われる。

遺跡地の発掘調査地点は水田となっていたので、発掘調査を実施するに当たっては、当初、水田造成時に移動した土の状態、埋土の状態を充分に観察し、現地に重機を入れて発掘調査に踏み切った。

調査結果は『発掘調査報告書』の通りである。唯一、検出された第1号住居址に伴って縄文前期後半の関西系北白川III式土器片が相当量出土し、広範囲での文化交流の足跡が実証された事実の一つとなった。

第2節 遺構と遺物

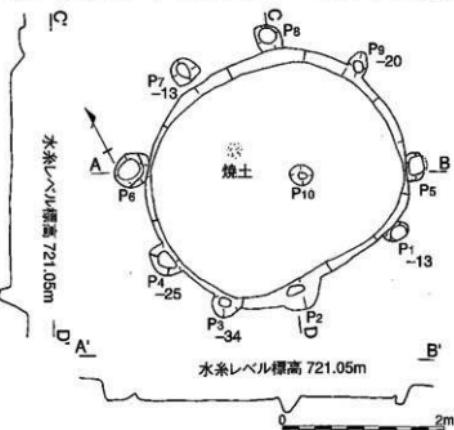
(1) 縄文時代の遺構と遺物

第1号住居址（第2・3図 図版2）

本住居址は今回発掘調査を実施した第2号トレンチの南側に検出され、表土層面より40cm位下層のソフトテフラ層を掘り込んで構築した円形状の堅穴住居址で、その規模は南北2m80cm程度、東西3m20cm程度の数値を数える。

壁面は20~30cm内外を測り、その状態は外傾気味で、軟弱を呈していた。床面は軟弱気味で、ブロック的な凹凸は認められなかつたが、大般、平坦であった。

柱穴は大小さまざま10ヶ所にわたって検出されたが、全て柱穴になり得る。住居址の中心部付近にP10が穿けられ、それを骨格にして10ヶ所の柱穴が、住居址の壁面及び壁面に近接して、ほぼ住居址の円形プランに沿って穿けられており、ちょうど、P10を中心とする円錐形状の屋根棟を成していたのであろう。P10の北西の床面上にわずかに焼土が検出され、住居址と確定できた。



第3図 第1号住居址実測図

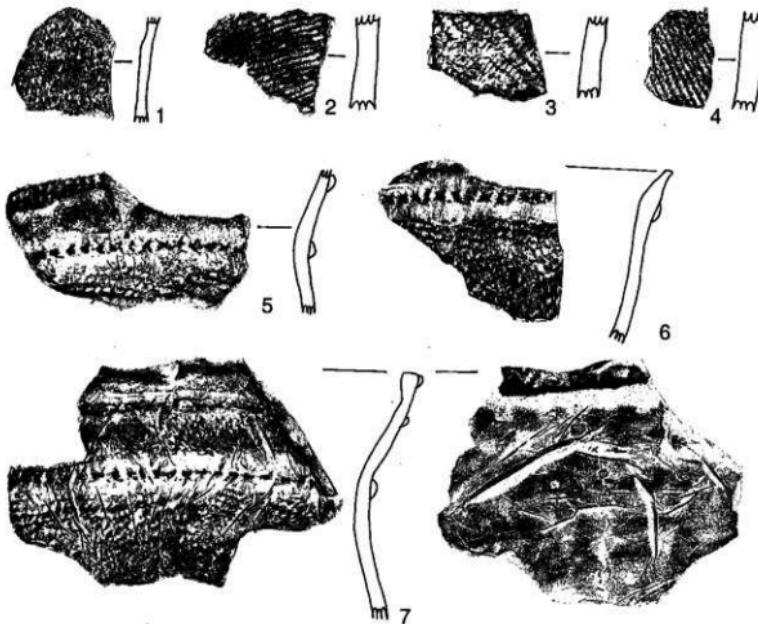
床面上より20cm位浮いて、北白川下層Ⅲ式土器片、諸磯b式土器片が出土した。よって本址は縄文前期後半の住居址と想定される。

遺物（第4図 図版2）

(1) は器壁が5mm程度の中厚手に属し、所謂、北白川下層式系の薄手式土器の部類に含まれ、無文地を成している。白茶褐色を呈し、多量の雲母がピカピカと光り輝いていた。焼成は良好で、内面に多量の炭化物が付着していた。

(2~4) は土器片の外面全体にわたって見事な斜縄文が覆っている。黒褐色を呈し、多量の雲母、長石、石英を含み、焼成は良好である。関東地方に波及した諸磯b式系統の一派と思われる。

(5~7) は同一土器の破片であり、ともに口縁部に含まれている。波状口縁を呈し、外反し、器厚は4mm程度と極めて薄く、しかも白茶褐色を呈し、一見するに縄文前期後半に關西地方を中心に波及した北白川下層Ⅲ式の一派と判別できる。口唇部は平坦を呈し、(7) のように口唇部直下の内面が肥厚したのも見られる。3片の土器文様を考えてみよう。外面の文様は無文地と斜縄文地が交互にくり返され、その上に低い横位状隆帶文を貼り付け、この頂きに連続



第4図 第1号住居址 出土土器拓影 (1 : 2)

刻目文を押捺してある。(7) のように口唇直下の内面に斜縞文を配し、時期的特色をかもし出している。3片とも少量の雲母、長石を含み、焼成は良好である。

(2) 江戸時代の遺構と昭和時代の遺物

旧原田井井筋 (第2・5図、図版3)

本遺構は今回の発掘調査地点の最南端部に検出された江戸時代前期（寛永年間）に開削された井筋であり、今回の調査によって構築状態が判明した。

表土面より50cm位下ったソフトローム層面を掘り込んで構築してある。井筋の上面幅は約6m、底面幅は3m位を、深さは最深部で2m程度をそれぞれ測る。南側の壁面はところどころで若干の凹凸が認められたが、全般的に急傾斜を成し、一見するに井筋と判断できた。壁面の上部はソフトテフラ層、中・下部はハードテフラ層によって組成土は成り立っていた。北側の壁面は搅乱が顕著で、その実態は把握が不可能であった。

埋没土の状態は第5図に示すように上から黒褐色土層、黒色土層、暗褐色土層、砂礫層Ⅰ、砂礫層Ⅱ、テフラ層の順に、きちんと層序が成立していた。

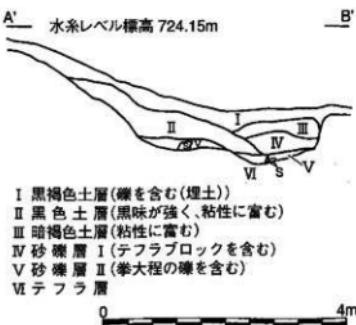
底面は南側と、北側に二つの凹みが見られ、上部から中部にかけては本流が西から、東へ走り、底面に至っては小さな流れが二本存在していたことが分かる。底面を組成しているテフラ層は流速が激しかったとみて、ところどころに凹みを造り出し、その中に多量の砂が堆積していた。

さらに堆積土の第IV層（砂礫層Ⅰ）にはテフラブロックを、第V層（砂礫層Ⅱ）には拳大程の礫を含んでいる状態は極めて激しい流れがあった事実を連想させてくれるのである。

今回の発掘調査では、江戸時代の遺物は何も検出されなかったが、底面より昭和時代の常滑焼の土管の断片が出土し、この時代まで利用されていたことがわかる。生存者は春先の井ざらい作業の苦労を語ってくれるが、このことは、出土した遺物との関連からみて、整合性がとれるのである。ほんのわずか断片的に掘ったために、井筋の細部にわたる構築方法は判明しなかった。

現在、この井筋は凹み状の原形をはっきりと残存しており、取入口から流末まで踏査すれば、さらにその実態究明に役立つのであろう。

（飯塚政美）



第5図 旧原田井井筋断面図

第IV章 所 見

城柵遺跡が世間に知られるようになったのは、第3節 遺跡の概要で記述したように、昭和47年中央道開鑿時に伴う調査以降からである。当時の調査は城柵遺跡のうちでも西端地域に、今回の調査は北端地域にそれぞれ該当していた。前置きはこの程度に留めておいて、今回の成果については簡略的に述べてみる。

縄文前期後半の関西系北白川下層Ⅲ式土器片を相当量出土した小規模の円形状竪穴住居址が1軒検出された。この土器に混じって、関東系の諸磯Ⅲ式土器片が少量出土した。この事実は六千年前に、東西文化の交流点が、この伊那谷の地に存在したこと、如実に実証してくれる。この時期の住居址の検出は伊那市では初見であり、今後、このような類例検出を期待するものである。狭い範囲での調査だったが、この時期では集落自体、小規模的な範囲で展開していたと考えられる。

次に、旧田井筋の歴史的背景について触れてみる。このことについては「伊那市歴史シンポジウム 信濃の牧・春近領・宿場」289~290頁を全面的に採用する。この文面は伊那市文化財審議委員 久保村覚人氏の講演によることを付記しておく。

「西伊奈部村（現伊那市荒井区・西町区・小沢区・平沢区・横山区・眞澄区、即ち小沢川と小黒川の間で天竜川より西方一帯）の担当代官である高遠藩鳥居公家臣の木村長兵衛へ開田計画を申入れ、更に、上達して家老職の高須源兵衛へ上申したところ、もっとものことだからよろしいという承諾を得た。

寛永14年（1637）丑の3月18日に工事着工をして、寛永15年寅の4月25日迄およそ1カ年かけて、井筋開削工事が完了した。工事の内訳については、平の内970間、原の内1200間で合計2170間（3949.4m）である。これに要した人工については、合計1456人であり、このうち100人は高須源兵衛様より御協力があった。残りの1345人については仲間で出し合い出勤した。

井筋が完成したので開田をして通水したみたが、最初は稻が実らなかった。よって御代官木村長兵衛を通じて、本煙見知畠（昔から既に畠となっているところ又は検地を受けている肥沃な古畠）を開田したい旨を、御家老に伝えたところ、開田してよろしいとの承諾を得たので、古畠を開田した。以上先の文書によれば工事期間は寛永14年3月から寛永15年4月とあることから1カ年を要し、延長はおよそ4000mの長きに及んでいる。これは現在（平成）の原田井幹線水路の延長と同じである。又これに要した人工は、延1456人となっていて、当時としては大規模な新井筋開削工事と言ってよい。」

現在、伊那市内には江戸時代に開削された何カ所かの有名な井筋が残され、開削時の苦労話が語り継がれている。ところが、井筋の構築実態はあまり把握されていない。今回のように考古学的な調査方法を導入する方向性を前向きに考えるべきであろう。

（飯塚政美）

図 版



遺跡地を東側より眺む



遺跡地を南側より眺む



第1号住居址



第1号住居址土器出土状況



旧原田井筋



旧原田井筋断面

報告書抄録

ふりがな	じょうらくいせき						
書名	城楽遺跡						
副書名	市道原田井1号線拡幅工事事業						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号	埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書						
編著者名	友野良一 飯塚政美						
編集機関	伊那市教育委員会						
所在地	〒396-8617 長野県伊那市大字伊那部3050番地 TEL0265-78-4111						
発行年月日	西暦2001年2月8日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 緯	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
じょうらく 城楽	ながのけん いなし 長野県 伊那市 あらい 荒井	伊那市	64	°' " °' "	平成12年 5月26日 ～ 平成12年 6月29日	500	市道原田 井1号線 拡幅工事 事業に伴 う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
城楽	集落址	繩文時代 江戸時代 昭和時代	竪穴住居址 1軒 井筋 1基	繩文前期土器 昭和時代陶製土管	住居址から関西系 の北白川下層Ⅲ式土器 が出土。これらの 土器に混じって関東 系の諸磯 b 式土器が 出土しており両地方 の文化的接点が分か る。近世前期に開墾 された旧原田井筋の 一端が判明した。		

城 樂 遺 跡

埋蔵文化財包藏地緊急発掘調査報告書

—市道原田井 1 号線拡幅工事事業—

平成13年2月6日 印 刷

平成13年2月8日 発 行

発行所 伊那市教育委員会
伊那市建設部建設課

印刷所 伊那市 瑞小松総合印刷

